

谷田のお茶栽培

県立大学一帯では、お茶畑が一面に見える。こういう景色は全国でも珍しく、県大が誇るべき風景であろう。

さて、その茶栽培はいつから行われたか？ひとつの興味ある問題である。

正確な文献や口碑もなく、きちんとした年代は不明だが、昔からの言い伝えによると、栽培は谷田、吉田、聖一色、池田、小鹿など、日本平（有度山）山麓でおこなわれていたようだ。（『有度村巡遊記』）、これを安部新山茶と称したという。商品用よりも自家用程度だった。

『静岡県茶業史』には、『茶畑を十年年賦で売り渡す』という国吉田村・善兵衛の証文がある。昭和二年（1765）のことである。このころから栽培が本格化していたようだ。

『幕末に急成長』

天保弘化（1830～1847）という幕末期。経済状況の好転から『商品としてのお茶』の需要が高まり、さらに安政（1854～1859）年間の幕末開国貿易で、お茶と生糸が主要商品になると、急速に栽培が広がり、現在の茶園の過半はこのころ開拓されたものだという。栽培法は自然のまま放置したもので、肥料も使わなかったという。

しかし、幕末・明治のころ、宇治・江州より茶師が来て、製茶法などを教えたため、技術進歩があり、ようやく『静岡茶』の名前がきけるようになった。

ときには紅茶も作られ、今のような『緑茶』は、

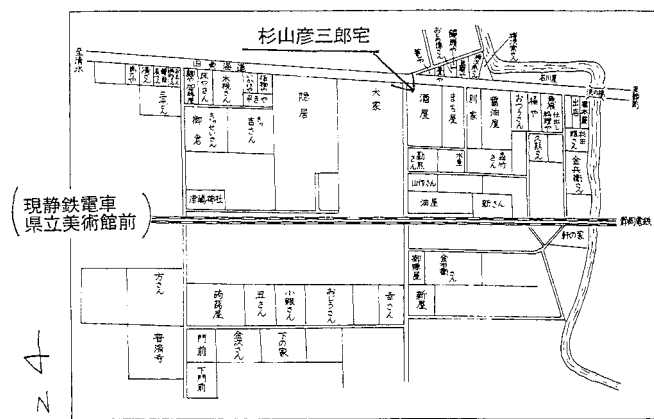
谷田風土記

明治二十年（1887）になって『天下一製法』（掬のように揉み出す方法）が、小笠郡の技術者により紹介され、これが普及してからである。

すなわち、お茶栽培がひろがったのは、ここ140年ほどということになる。その茶の積み出しが清水港であり、運んだのが「静鉄電車」なのである。ちなみに、茶の木をきちんと田圃の稲のように植える方法は、この谷田から始まったといわれている。また、県立大学は、茶業研究所の試験栽培農園のあとなのである。そこにあった「ヤブキタ茶」原木は、いまでも県立大学西側の県立図書館に向かうプロムナード道路に現存している。日本の茶樹の大半を占める「ヤブキタ」をつくりだした杉山彦三郎は、当時「酒屋」であった。ヤブキタ記念碑は、静鉄電車「県立美術館前」を西に行った津島神社に現存している。

80

（国際関係学部・高木 桂蔵）



杉山彦三郎時代の地図

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

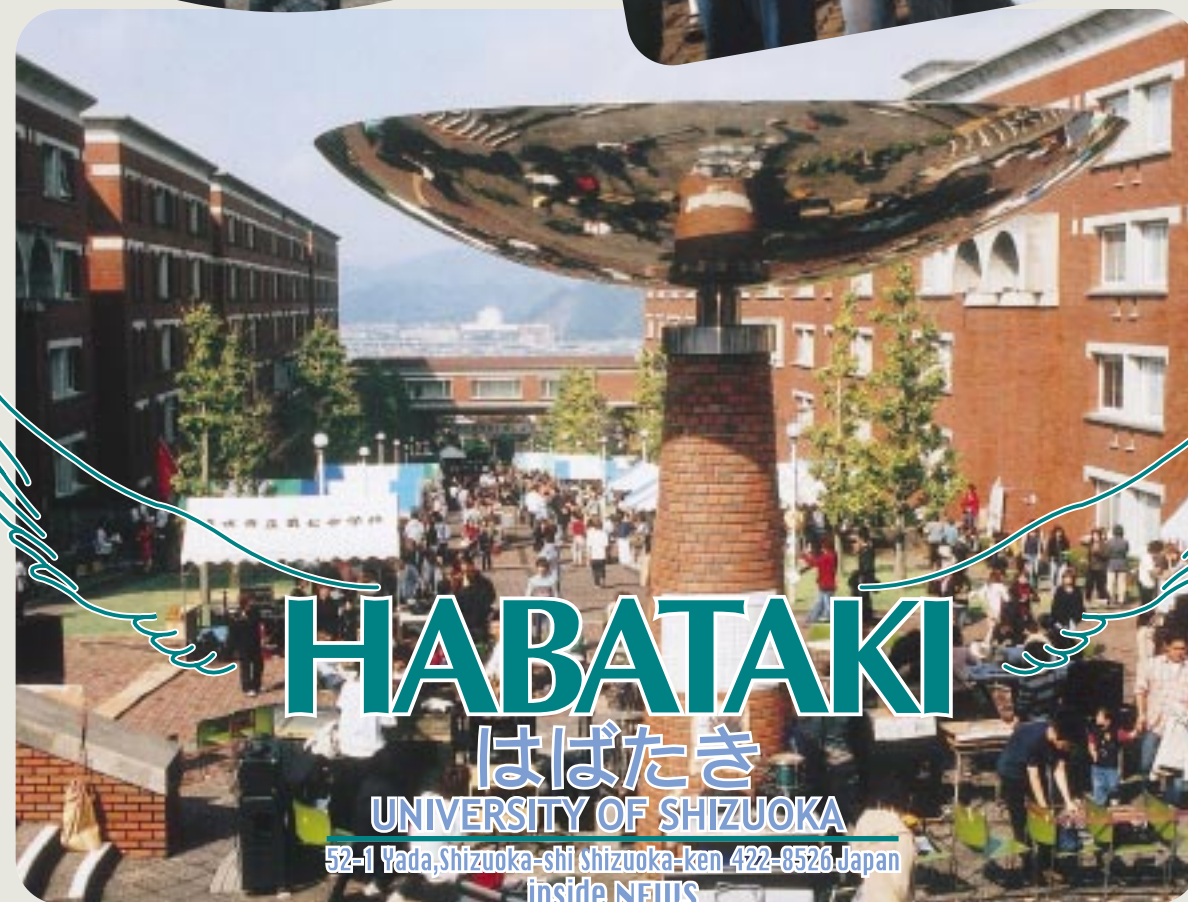
教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル、その他寄稿を積極的にお寄せ下さい。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟2階）法月あてにお願いします。

E mail:kijo4@gm.u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集 静岡県立大学広報委員会 TEL 054-264-5103

静岡県立大学ホームページアドレス：http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp



CONTENTS

Table with 2 columns: Article Title and Page Number. Includes items like '創祭...', '院生からのメッセージ...', '研究室・ゼミ紹介...', '静岡発祥88周年...', '看護学部公開セミナーを開催...', '計測連合シンポジウムを開催...', '東海大学翔洋高校生が環境を学ぶ...', 'アリゾナ大学教員が本学で講義...', '国公立4機関連携講義を開催...', '図書館ホームページをリニューアル...', 'はばたき寄金からのお知らせ...', 'ニューキャッスル大学語学研修に参加して...', '谷田風土記...'.

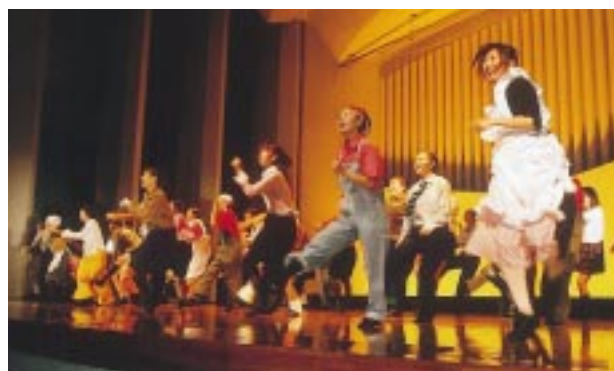
はじけてGOGO! 大楽祭 第17回剣祭・大盛況に終了

本学の大学祭である「第17回剣祭」が11月1日(土)から3日(月)までの3日間開催された。今年の剣祭のテーマは「はじけてGOGO! 大楽祭」。

11月1日のオープニングセレモニーでは、廣部学長の挨拶に続き、剣祭実行委員会委員長の長谷川君が開催の挨拶を行い、くす玉が割られ開会が宣言された。

今年の剣祭は、好天にも恵まれ、学生や教職員、親子連れの家族、高校生のグループなど大勢の入出があった。

学部棟では「お菓子の家」「研究室公開」や「Miss & Mr.コンテスト」「カラオケKING」などのイベントが行われ、また文科系のクラブ・サークル等が活動状況を発表・展示した。初日には看護学部棟で、留学生日本人学生によるスピーチコンテストも行われ、聴衆を魅了していた。ユニバーシティプラザでは多くの模擬店が出店、コミュニティプラザ、体育館でも「フリーマーケット」や音楽、ダンスなどの各種イベントが行われた。大講堂ではジャズダンス部、箏曲部の発表会、招待バンドのチャコール・フィルターライブが行われた。



薬学部とタイ王国コン・ケン大学医学部・薬学部が学部間協定を締結

薬学部(辻邦郎学部長)は、11月12日、タイ王国のコン・ケン大学(Khon Kaen University)医学部および薬学部との間で学術交流に関する学部間の交流協定を締結した。

調印式は、コン・ケン大学医学部長、薬学部長ら14名が来日し、廣部雅昭学長の立会いと薬学部長他、同学部教員出席のもと、本学の特別会議室で行われた。

薬学部は、この協定に基づき、コン・ケン大学の医学部及び薬学部教員並びに博士課程の学生を受け入れることとなるが、今秋より既に教員1名と留学生2名を受け入れている。

コン・ケン大学は、タイ王国有数の国立大学であ

り、研究・教育体制も整っていることから、今後は、医学部との学術・教育の交流を進めるとともに、薬学部と薬学教育、薬剤師教育の推進を図っていくこととしている。



調印式

静岡県立大学の“産学官民”連携を考える集いを開催します

本学では、従前より産学官の連携を社会貢献の大きな柱として位置づけて、取り組みを行ってきたところですが、さらに、今年度よりコーディネーターを配置したことから、一層の推進を図るため、企業関係者にも呼びかけ「静岡県立大学の“産学官民”連携を考える集い」を開催することとしました。

集いは、次のとおり3部構成で開催しますので、奮ってご参加ください。

日時 平成16年1月26日(月)

会場 静岡県立大学

内容

第1部

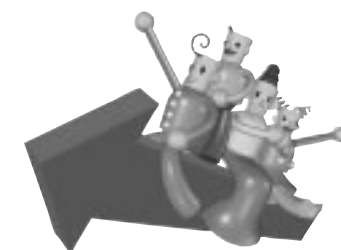
研究室の開放(13:30~15:15) 各研究室
・研究室を開放し、教員が研究内容等を紹介する。

第2部

静岡県立大学の“産学官民”連携を考える集い(15:30~17:40)大講堂
・静岡県立大学の産学連携の状況説明
木苗 直秀 静岡県立大学産学連携推進委員会委員長(食品栄養科学部長)
・講演会
時光 一郎 花王株式会社生物科学研究所室長(医学博士)

第3部

交流会(18:00~19:30) 学生ホール
・産業界、静岡県(県知事ほか)、大学関係者等による交流会
・参加費 2千円



国際関係学部・国際関係学研究科の動き

国際関係学部長・六鹿 茂夫 / 就職委員会委員長・津富 宏

国際関係学部は、発足以来、高度な研究機関および教育機関たるべく努力を重ねて参りましたが、昨今の就職難に鑑み、学生諸君の就職支援にも積極的に取り組み始めました。そのためには、まず1. 生きた英語が使える、2. コンピューターが自由に駆使でき、3. 地域言語および地域研究に詳しく、4. さらに最低限どれか一つのディシプリンに習熟した県大国際関係学部生、といったカラーを社会に対して鮮明にしていく必要があると考え、2001年秋からTOEIC講座およびコンピューター講座を始めました。また、昨年度より新入生全員がコンピューター・リテラシーを受講できる体制を整えるとともに、習熟度別の英語クラス編成を導入すべく、入学式の翌日と7月29日の二回にわたりプレースメント・テストを実施しました。

就職委員会では、昨今の厳しい就職状況に対応するため、後援会のご支援を得て、本年度から前期の水曜5限にキャリア形成のための連続講座を設け、主として1年生を対象に、労働問題の専門家、行政機関、NGO、民間企業などの方々からお話をいただきました。現在の学生には、働くということについての根本的理解が不十分であるという認識をもとに、低学年からスタートするキャリア形成支援の一環として始めたプログラムです。



学生には好評で、来年度も継続してほしいとの声が多く寄せられました。

また、就職支援も念頭におき、昨年度から、学部卒業生・研究科修了生、学生、現職・退職教員を会員とする「静岡県立大学国際関係学部・研究科同窓会」(<http://fuji.u-shizuoka-ken.ac.jp/dosokai/home.htm>)の設立準備を進めてきました。おかげさまで、11月の剣祭の際に開かれた総会において、正式に発足いたしました。会長は一期生の吉添克宏さんにお引き受けいただきました。すでに200名を超える方にご入会いただきましたが、さらに多くの方に御入会いただけるよう、会の活動内容を充実していきたいと考えています。剣祭では卒業生を招いての就職相談会も行いました。6人の卒業生においでいただき、在学生との熱心な意見交換が行われました(写真参照)。

学生の自主的な動きとして注目されるのは、3年生を中心に活動を始めた「学生ネットワーク」(<http://fuji.u-shizuoka-ken.ac.jp/career/index.htm>)です。就職の決定した4年生から話を聞く会や、社会人の方々との勉強会、民間企業などにおけるインターンシップなどの企画を成功させました。その活動の一部は地元メディアでも取り上げられ

るなど、自らの将来を自分から切り開いていこうとする、学生の積極的な活動に期待を寄せています。

国際関係学研究科長 菱田 雅晴

国際関係学研究科に求められる教育・研究の質は、発足時点に比べ、今や飛躍的に高いものになっています。このため、当研究科では、現状の大学院研究科体制にさまざまな改革を進めていますが、今年初に「現代韓国朝鮮研究センター」を当研究科附属研究施設として発足させたのに続き、本年度からは専修免許プログラム(英語、日本語)

をカリキュラムに導入いたしました。また、現在、入試実施時期、試験科目等を中心に研究科入試制度の全般的見直しを行っていますが、これは入学から修了に至るまでの教育プログラム全体を再検討し、新たに求められる国際関係分野の人材を如何に養成するかという努力の一環です。中でも、現研究科の中に国際関係学専攻(博士課程後期)を平成17年度に開設すべく、文科省との協議、相談を開始した点は特筆されます。博士課程を設置することにより、現行修士課程の刷新、ひいては国際関係学部のより一層の活性化への弾みとなることが期待されます。

オープンセミナー2003に多くの高校生が参加

経営情報学部では、10月18日(土)にオープンセミナーを開催し、延べ100名以上の県外を含めた高校生の参加をいただきました。

オープンセミナーは、高校生の皆様に、本学部の先生方を知っていただくことを目的に開催しました。その意味で次の項目は達成されたでしょうか?

(a) 多くの先生方との出会いが達成されましたか? 大学の先生は、どなたもそれぞれに強い個性を持って授業に当られます。一人の先生の授業のみに出席して、大学の授業とはこんなものかと早合点するのはよくありません。ぜひ、何人もの先生の



セミナーを受けて見ましょう。多様な物差しの存在するところ、それが大学なのです。

(b) 本学部のセールスポイントでもある「少人数教育」の良さをご理解いただけましたか? 今年オープンセミナーの定員を最大20名と設定しましたが、本学部での卒論ゼミは本来は5名を基本(ゼミの性格によって、多少の「標準定員」からの増減はあるが)としています。

(c) ゼミで思い通りに発言ができましたか? どの先生も、皆さんのゼミ中での発言を大いに期待されていたはずですが、緊張するのは皆さんだけでなく先生方もそうなのです。皆さんへの発言をうまく引き出せなくて、悩んでおられる先生もおられました。気楽に参加し発言をしてください。

(d) 先生の名前を覚えることが出来ましたか? もし、ゼミに親しんでいただけたら、ついでにその先生方の名前も覚えてください。今年、メールアドレスを調べて、さっそく先生へセミナーの感想を送ってくださった高校生もいます。ほめ言葉だけでなく、注文や批判も大歓迎です。

経営情報学部動き

経営情報学部長 小林 みどり

経営情報学部は、現在、1～4年の学生443名、教員27名から成っています。学生のうち9名は留学生で、その出身地は中国、インドネシアです。教員は、昨年、経営戦略・国際経営論の教員が新たに着任しました。

経営情報学部は、他学部と異なり、文理融合学部であることに特徴があります。カリキュラムの内容は、社会科学系の「経営学」と、理工系の「数理科学」、「情報学」の3つの分野を組み合わせたものになっています。これら3つの分野を4年間で修得するのは、現実には難しいため、他大学では、「経営コース」と「情報コース」に分離する例が多く見られます。しかし本学部は、これらを敢えて分離せずに、全学生に対して「経営学」、「数理科学」、「情報学」の全ての講義を提供しています。

昨年度、カリキュラムの大幅な見直しを行い、今年度から新カリキュラムを実施しています。新カリキュラムでは、文理融合の理念を一層進めるため、経営情報総合科目を新設しました。この科目は、1つのテーマの下に、「経営学」、「数理科学」、



オープンレクチャ

「情報学」の教員がチームを組み講義を行うというものです。今年度は、環境マネジメントというテーマの講義を開講しています。この講義では、科学・技術、経済、政策、管理会計のそれぞれの専門教員が連携して講義を行い、さらに企業や行政の現場の方を招いて、廃棄物減量化等の講演も行います。

その他、新カリキュラムでは、英語教育の強化とTOEIC受験の義務化 低学年ゼミの開講 卒論ゼミ開始時期の早期化 講義の学年指定と既習科目指定 プロジェクト指向教育の推進なども取り入れました。

今年度も高大連携事業として、全学で8月に実施しているオープンキャンパスの他に、学部主催で6月に「オープンレクチャ」、10月に「オープンセミナー」を実施しました。オープンレクチャは、本学部の講義の紹介と模擬授業を行うもので、90名の参加者がありました。オープンセミナーは、本学部の教員の紹介を行うもので、今回はゼミ形式で行ったため、定員制(1ゼミにつき最大20名)をとりました。延べ参加者は122名もありました。高校1、2年生の参加も増えてきており、また、愛知、岐阜、長野、福井、富山、島根など、県外からの申し込みもあり、県内でも遠方からの参加者も多く、意欲的で熱心な高校生が多く見られました。

8月には1年生を対象とした学外研修を行いました。今年の学外研修先は、静岡空港建設現場と大塚ペパレッジ(株)袋井工場です。民間企業を学外研修の見学先に選ぶことが多いのですが、今回は静岡空港建設現場を大規模な公共事業の一例とし



学外研修

て見学しました。最初に静岡空港のビジターセンターで静岡空港の概要についての説明を受け、その後、空港建設の工事現場に移動しました。午後から大塚ペパレッジ(株)袋井工場に行き、会社や工場の概要についての説明を受け、ペットボトル飲料製造のラインを見学しました。この学外研修を通じて、公共事業、飲料品の製造工程や生産設備などについて理解を深めることができました。

県内の高校などから、教職課程設置の要望が本学部に寄せられています。その要望に応えるべく、今年度から、「情報」「商業」「数学」「公民」など

の科目について、教職課程設置の検討を行っています。

第1回ホームカミングディ・同窓会設立総会が、剣祭の時期にあわせて11月2日に行われました。当日は約50名の卒業生と初代学部長の林周二先生や元学部長の大坪檀先生も出席され、思い出話や近況報告など楽しいひと時を過ごしました。会長や会則も決定し、念願の学部同窓会がスタートしました。

以上、経営情報学部の最近1年間の動きを紹介いたしました。



県大と岩手を結び「防災情報シンポジウム」を開く

本学と、岩手県田老町、滝沢村の遠隔地3箇所をJGN(Japan Gigabit Network)などの高速回線で結んだ「防災情報シンポジウム」が開催された。メイン会場の岩手県田老町役場では、湯瀬裕昭経営情報学部助教授が防災サイト「東海地震ドットネット」の狙いや機能を説明するなど、講演者4名がIT(情報技術)を活用した各地の先進事例を報告した。県大では鈴木直義経営情報学部教授をはじめとする教員、学部生や大学院生、静岡県の防災担当者などが参加し、スクリーンに写った岩手の会場と防災情報の伝達のあり方などについて熱心に質疑や討論を行なった。





日本薬学会の薬学会賞と学術振興賞受賞が決定！

平成16年度日本薬学会の薬学会賞を鈴木康夫薬学部教授が、学術振興賞を武田厚司薬学部助教授が受賞することが決まった。受賞の概要は次のとおりで、表彰式は、平成16年3月28日(日)に大阪市で開催される日本薬学会年会において行われることとなっている。

日本薬学会賞の受賞

(1)受賞者 鈴木 康夫 (静岡県立大学薬学部教授)

(2)表彰業績

研究題目「ウイルス感染における糖鎖薬学的研究」を薬学的視点から、ウイルスの受容体機構、宿主域、宿主間伝播、変異・進化など、ウイルス感染における糖鎖の機能の重要性を先駆的に解明し、その成果を新規抗ウイルス薬開発の基盤創成へと応用した。この過程で、糖鎖生物学、ウイルス学、創薬を融合させた新領域を開拓した。

(3)「薬学会賞」の概要

薬学の基礎および応用に関し、薬学会を代表する研究業績をあげ、世界の学術進歩に著しく貢献した研究者に与えられる同学会最高の賞である。平成15年度の薬学会賞の受賞件数は、3部門から4名の受賞者となっている。



日本薬学会学術振興賞の受賞

(1)受賞者 武田 厚司 (静岡県立大学薬学部 助教授)

(2)表彰業績

研究題目「生体微量元素の作用に着目した脳機能解析と脳疾患の予防」に関する研究は、ここ数年間で48報の国際学術雑誌に発表された。その内容は、亜鉛、マンガン、鉄などの重金属の脳における機能と毒性に関するものであり、短期間のうちにこの分野を世界的にリードする研究者として注目されるようになり、この研究成果が受賞対象となった。衛生薬学、薬理学部門での受賞である。

(3)「学術振興賞」の概要

薬学の基礎および応用に関し、各専門分野で優れた研究業績をあげ、その振興に寄与し、世界的にも注目される発展性のある研究者に与えられる賞である。受賞件数は、6部門から6件以内となっている。

日本薬学会の概要

日本薬学会は「くすり」に関係する研究者や技術者が、学術上の情報交換を行い、学術文化の発展を目的とする学術団体である。新しい医薬品の開発・製造、安全性の確認、臨床への供給など薬を使ってさまざまな病気を克服するという目的のもと、2万人を超える会員の情報源として機能している。日本薬学会は、さらに新しい未来を創造しながら、生命現象の解明と医薬品の適正使用をめざして会員とともに人類の健康と福祉のための努力を通して、着実な発展を続けている。



子供たちの指導者として国際関係学部の小田佳枝さんが受賞

静岡県青少年健全育成青少年指導者の部

国際関係学部国際言語文化学科4年の小田佳枝さんが、11月13日に開催された青少年健全育成静岡県大会(静岡県青少年育成会議主催)の席上、青少年指導者の部で表彰された。小田さんは、静岡県レクリエーション指導者連盟が主催する「静岡県子供アドベンチャーキャンプ」に兄弟で小学校4年生より参加。中学生のジュニアリーダーを経て、高校、大学と6年間子供達の生活指導にあたってきた。アドベンチャーキャンプでは通算10年間、指導者としてリーダーシップを発揮してきた。

また平成13年度には日本レクリエーション連盟の認定するレクリエーション・インストラクターを取得するとともに、静岡県レクリエーション指導者連盟に入会、ウォークラリー大会などの地域社会での活動にも参加するなど、活躍の場を広めている。



食品栄養科学部卒業生の活躍

開発した商品が農林水産大臣賞を受賞

平成3年度食品栄養科学部卒業、平成5年度大学院生活健康科学研究科修士課程卒業の橋詰昌幸さんが、えんげ困難者用食品として、株式会社マルハチ村松において開発した「海鮮煮ごり詰め合わせ」が農林水産大臣賞を受賞した。

「海鮮煮ごり」は、のみこみが困難な方のための食品で、かつおいしさを保ったものであり、聖隷三方原病院栄養科・科長、金谷節子先生のご指導の元に、橋詰昌幸さんが中心となって、企画・開発したものである。11月13日に、賞がマルハチ村松に手渡された。



奥浜名の“おいしい”コンテストでグランプリ受賞

食品栄養科学部平成13年度卒業の鈴木英里さんが、奥浜名地域の食材を使った創作おやつレシピを競う奥浜名の“おいしい”コンテストで、書類選考された6点の中から試食審査によりグランプリを獲得した。鈴木さんが作成した「カロテンロールケーキ」は、小松菜入りのロール生地に風味豊かなかぼちゃクリームをはさんだもので、ヘルシーな素材とやさしい色合いが高い評価を得た。「健康を意識し、和風のあっさりしたケーキを目指した。」とコメントしており、わが県大の目指す食と健康をテーマに獲得した栄冠といえる。



研究助成の採択

平成15年度 財団法人エリザベス・アーノルド富士財団 研究助成

研究題目「麦類に含まれるポリフェノール類の脂質二重層に対する作用」
 食品栄養科学部 食品製造工学研究室 助手 熊澤 茂則

平成15年度 財団法人 住友財団基礎科学研究助成

研究題目「植物ポリケチド合成酵素の構造機能解析と新規生物活性物質の創出」
 薬学部 生薬学教室 講師 阿部 郁朗

平成15年度 第21回 財団法人 持田記念医学薬学振興財団 研究助成金

研究題目「生薬植物成分を起源とする新規高脂血症治療薬の開発」
 薬学部 生薬学教室 講師 阿部 郁朗

平成15年度 第21回 財団法人 持田記念医学薬学振興財団 研究助成金

研究題目「生理状態の変化に伴う肝薬物代謝酵素変動機構の解析」
 薬学部 臨床薬品学教室 講師 吉成 浩一

科学研究費採択

基盤研究(C)

木苗直秀 食品栄養科学部教授 生体異物の複合毒性評価法の確立と植物成分による毒性軽減効果
 熊澤茂則 食品栄養科学部助手 プロポリスとその起源植物に関する化学生物学的研究

特別研究員奨励費

研究指導員・山口正義（生活健康科学研究科教授） 研究員・鶴崎美徳
 研究指導員・横越英彦（食品栄養科学部教授） 研究員・辻岡和代

外国人特別研究員奨励費

研究指導員・鈴木康夫（薬学部教授） 研究員・GUO, C.-T.

教員の人事

採用

（10月1日付け）
 伊藤 創平 生活健康科学研究科助手
 （11月1日付け）
 小野 孝彦 薬学部教授

昇任

（11月1日付け）
 佐野 満昭 薬学部助教授
 根本 清光 薬学部講師

クラブ・サークルの最新情報をホームページでキャッチ！

■ 県大ホームページにクラブ・サークルの最新情報がアップされました（トップページのクラブ・サークル情報から入る）。クラブ・サークル等の試合結果や活動状況、今後の試合や活動の予定などがコメント、写真付きで掲載されており、学生の活躍の様子を知ることができます。

■ 生まれたばかりのこの情報の泉を枯らさないよう、学生と教職員が力を合わせ、情報の適時・的確な発信に努め、クラブ・サークル活動のより一層の活性化につながるよう頑張りましょう。

情報提供先：事務局企画スタッフ 電話：054-264-5103 FAX：054-264-5099

E-Mail：kijo4@gm.u-shizuoka-ken.ac.jp

院生からのメッセージ 看護学研究科 院生室だより

看護学研究科1年生一同

この春より静岡県立大学看護学研究科の院生となり、通学し始めて早くも半年が過ぎました。大学生のころは、勉強を半ば義務のように捉えているところもあって、生き生きと勉強することができていなかったように思います。しかし、臨床経験を積んで改めて勉強してみると、さまざまな経験にいろんな意味があったことや、ものの見方にいろんな角度があることを知り、それがとても興味深くて、自ら学ぼうという姿勢が自然と生まれていることに気づきました。こんなことを言うとても優等生のように聞こえるかもしれませんが、学んでいることで少しずつ広がっていく世界を感じて、実りの多い毎日を過ごしています。

看護学研究科1年の仲間は、大学卒業後、看護師として病院で臨床経験を積んできた人や海外での経験を経て入学している人など様々です。少し仲間を紹介しますと、県大看護学部の卒業生でラットの実験に没頭中の学生、院生・母・妻の3役をこなす学生、はるばる寒い北海道からこの温暖な静岡の地へやってきた学生、浜松から約2時間かけて電車で通ってきている学生の4名が在籍中です。所属領域は病因・症候論1名、成人看護技術学2名、保健・医療システム学1名です。年齢やこれまでの経験も異なる私達ですが、ナースとしての熱い思いを胸に秘めている人の集まりなので、講義でのディスカッションはちがう観点から意見が出てとても刺激的な時間となります。

看護研究科に入る前に臨床経験を積むことは、看護が患者さんという一人ひとりの人間を相手に

することからも、非常に重要ではないかと思いません。現実の状況に考えさせられ、医療現場をより良くしたい、もっと自分を成長させたい、そんな目標が次々に出てくるのです。とはいっても、苦労は絶えません。講義の中で難解な疑問にぶつかったり、課題や修士論文の準備に追われたりして、身体的、精神的、経済的にも不安定な毎日でもあります。泣いたり、笑ったり、怒ったり、落ち込んだりと忙しいですが、4人という少ない人数で力を合わせて乗り越えていきたいと思っています。そして限られた大学院生活をめいっぱい楽しんでいきたいと考えています。

この看護学研究科が設立されて、今年で3年目になります。まだ出来て間もない研究科ですが、今後の発展に貢献していけるように、私達も一歩一歩確かな歩みを進めていきたいと思っています。



研究室・ゼミ紹介

人も虫も花も一緒に

食品栄養科学部 細胞生理学研究室

私たちの研究室は、本学開学時より研究室を率いてこられた三好先生のご退官にともない、この春少しのリニューアル(?)がなされ、研究室としては第二期への新たな出発を始めた古くて新しい研究室です。研究室のメンバーは8人、植物生理学と人類遺伝学、すなわち植物とヒトという一見異なるものを研究対象とする2つのグループに分かれて研究活動を行っています。

私たちの食料としても重要な植物は、成長していく過程で細胞や組織・器官が自己分解する現象が数多くみられます。たとえば、花は開いて受精という役割を果たすと自己分解してその一生を終えます。植物生理学グループでは、このような自己分解がどのようなメカニズムでおこっているのかを分子レベルで解明しようと、日夜研究に取り組んでいます。一方、人類遺伝学グループは、現在その増加や若年化が問題になっている肥満や糖尿病、高血圧、高脂血症といった生活習慣病について、個人の体質を考慮にいたれた新たな予防法、すなわちオーダーメイドの健康管理法を開発するための基礎研究に取り組んでいます。ヒトゲノムの全塩基配列の解明や遺伝子分析技術の進歩によって、生活習慣病の発症には食生活や運動に代表さ

れる生活習慣だけではなく、個人の体質(遺伝子)も大きく関与していることがわかってきたからです。

私たちの研究室の実験台上ではナズナの花が咲いていたり、ヒトのDNAがたくさん並んでいたり、また食品栄養科学部1年生の必修科目である生物学実験を担当しているため、その実験材料であるタマネギ、ソウリムシ、ショウジョウバエ等も栽培・飼育されています。お互いの研究対象やテーマに違いはありますが、研究室メンバーのチームワークのよさは抜群で、それぞれが自由に楽しい研究生活を送っています。もうすぐ年に一度の研究室旅行(今年は長野県穂高温泉までドライブ)が予定されており、みんなで楽しい計画を練っているところです。

(小林公子)



静薬発祥88年(静薬創立88年、大学開学50周年)記念

本年(平成15年)は、本学薬学部の前身である静岡薬女子学校が大正5年(1916年)に静岡市鷹匠町の地に創立されて以来88年、また昭和28年(1953年)静岡県立静岡薬科大学の開学からは50周年の節目の年を迎えました。その間、着実な発展と充実を重ね、教育・学術研究の拠点として高い評価を受け、卒業生は各界・各方面におい

て大いに活躍しています。

これを記念し、平成16年5月8日(土)に「記念式典・記念講演」および「記念祝賀会」を開催します。また、薬学部の沿革を記した銘版の作製、記念誌の発行、国際交流基金の設立を計画しています。

英語が飛びかうゼミ

国際関係学部 吉村紀子ゼミ

日本語で「彼は何をを読んでいるのですか」という文章は「何を彼は読んでいるのですか」とも言うことができます。しかし、英語では「What is he reading?」とは言いますが「He is reading what?」とは言えません。なぜだか考えたことがありますか?

私たちのゼミでは、このような問題を観察しながら、英語や日本語の文構造や言語現象について勉強しています。今年は、分厚い英語専門書の読破を目指して、週1~2回の個人勉強会も開いています。英語で書かれた論文をたくさん読むのは最初大変ですが、普段英語を読む機会が少なかった人でも、努力すればだんだんと読むのが楽しくなってきます。英語が苦手な人でも大丈夫です。これから英語を読む力をつけたいと思っている人、がんばって勉強したい人に、吉村ゼミはおすすめです。

現在は4年生2名と3年生4名で行われています。そして、時々大学院生が参加します。アットホームな雰囲気、いろいろな質問についてみんなでワイワイ話し合いながら答えを探します、先生もわかりやすく説明します。食事会を開いて美

味しいものを食べながら、先生やゼミ生同士親睦を深めることもできます。ゼミ合宿も行いたいと思っています。

吉村ゼミの卒業生は、JICAや商社で英語を生かした仕事に就いたり、公立中・高校の英語教員になったり(7名)、海外大学院博士課程に進学したり(3名)がんばっています。ゼミ先輩の話をするとき聞く機会がありますが、今後の進路を考える時、とても参考になります。また、先生になっている人が多いので、教職を目指す人にとってよいゼミです。

興味をお持ちの方は、気軽に見学に来て下さい。



Su-Ken is not a circle...

経営情報学部 鈴木直義ゼミ

数学研究室(「数研」)は学部1年生から大学院生までの学生達の自律的研究組織です。教員は環境整備など、活動の支援に徹しています。「数研」とその若手育成組織の「数研基礎ゼミ」をそれぞれ学生達のことばで紹介します。



「数研基礎ゼミ」は、学部1・2年生対象のゼミで、従来からの「数研」の特徴である、低学年からの一貫した研究環境の提供、が正規の授業とした発展したものです。

普段は個人又はグループで、上級生の助言を頂きながら研究に取り組んでいます。そして随時ゼミを開催して情報通信技術や活動の成果を発表し、意見交換を行います。個々に研究を行うだけでなく、プロジェクト単位で組織的に活動することも多くあります。日頃からメーリングリストや数研開発の情報共有ツールを使って活発に情報交換をし、コミュニケーションを密にとっています。

数研基礎ゼミの特徴は、効率的に知識を詰め込むのではなく、「子が親から言葉を学ぶように」試行錯誤しながら「数研」環境から自然に情報技術等を習得することを目標としていることです。

(1年生 渋沢・旗持)

「数研」は、一言でいうならば自発的、能動的に活動する人たちの集まりです。

主に情報通信関連技術を研究している人が多いことから、その目的は情報専門家の育成とおもわれがちです。しかし、学ぶことができるものはそれだけではありません。実践的なプロジェクトを通して多方面の知識や技術を習得しています。また、「知識や技術は外部から与えられるものではなく自ら磨くもの」といった考え方に徹していると思います。数研には常に自から成長できる空間があります。

さらに、OB・OGには様々な学部の様々な分野の専門家がいらっしゃいます。鈴木直義教授はじめ他のゼミの先生方からも随時貴重なアドバイスをいただくこともできて、充実した学生生活を送ることができています。

(3年生 勝見)

計測連合シンポジウム(第14回)の開催

日本学術会議・工学共通基盤研究連絡委員会・計測工学専門委員会では、1990年以来、毎年「計測連合シンポジウム」を開催し、専門家を対象とした先端的計測技術の研究成果と技術動向の解説などの話題を提供してきた。平成15年度は、本シンポジウムを、一般人を対象とした啓蒙活動と位置づけ、初の試みとして地方都市で開催することになった。環境科学研究所の岩堀恵祐教授が専門委員会(第18期)委員であることから、本学での開催を要請され、日本学術会議、電子情報通信学会(担当学会)と環境科学研究所で9月5日(金)に小講堂でシンポジウムを主催した。

シンポジウムは『先端計測2003 “計る・測る・量る”』をメインテーマに、総論的な「計測あれこれ」と、「生体」「ストレス」「食」「環境」「ナノ」「宇宙」をキーワードとした“はかる”を平易に解説いただいた。静岡県民並びに計測工学関係者、本学の教職員・学生など、総数150名の参加者は、それぞれ

の話題に熱心に聞き入っていた。アンケートの集計結果では、『面白かった』『非常に参考になった』などの意見が多く、『またここで開催して欲しい』の感想に代表されるように、県民を対象とした啓蒙活動は大成功であった。また、話題提供者の発表スライドをカラー印刷した配付資料も『読みやすい』と好評であった。なお、シンポジウム開催にあたり、学長特別研究(研究集会助成)から援助いただいた。この紙面を借りて厚くお礼を申し上げる。



暴力なんてふるわない! 暴力なんてふるわれない! 海外の講師を招き看護学部公開セミナーを開催

看護学部では、11月18日、アジア女性研究所と共催で公開セミナー「暴力なんてふるわない! 暴力なんてふるわれない!」を開催しました。講師は、カナダで若者のための暴力防止プログラム「ティフ・ティーン」を開発したアニタ・ロバーツさんでした。公開セミナーには学部生や一般市民、教職員など2百人を超える参加者が熱心に聴講しました。アニタ・ロバーツさんは、男性から性的被害を受けた場合の女性の反応を、聴講者をステージに挙げ「見知らぬ男性からじろじろ見られ声をかけられた場合」を例に実演し、その場合の対処方法の手ほどきを行いました。アニタ・ロバーツさんは女性に強く自尊心を持ち、男性の行為に対しいやだという気

持ちははっきりと伝えること、特に3回まではっきり伝え、何度も言わないことが大事と話し、アサーティブネス(自己主張すること)などコミュニケーションの重要性を強調しました。



東海大学附属翔洋高校生が本学で環境を学ぶ

11月8日(土)本学環境科学研究所に東海大学附属翔洋高校生徒40名が訪れ、「植物に含まれる有害物質の検出と分析」をテーマに講義と実験が行われました。これは同校の平成15年度サイエンス・パートナーシップ・プログラム「研究者招へい講座」(生徒の科学技術、理科、数学に関する興味・関心と知的探究心を一層高めることを目的とした文部科学省支援事業)のひとつで、全8回の講座のうち4回を環境科学研究所教員が担当し、化学物質の環境に与える有害性と有益性の両面について講義します。

当日は下位香代子助教授の指導のもと、道端に生えている雑草から有害化学物質を検出する実験が行

われ、生徒たちは大学院生の手助けを受けながら、真剣なまなざしで抽出物の分離精製に取り組んでいました。

12月は吉岡寿教授による「環境に有益な化学物質」をテーマとする2回の講義と実験が予定されています。



アリゾナ大学薬学部臨床薬学 Michael Katz準教授のセミナー、講義が開催された

10月2、3日に、本学と国際交流協定を締結したアリゾナ大学の薬学部臨床薬学のマイケル・ケイツ (Pharm. D.)準教授が、臨床薬理学の中野眞汎教授のお招きで来学した。以下のテーマで、米国での臨床薬剤師業務と臨床薬学教育について紹介された。

(臨床薬理学教室主催、紹介者：中野 眞汎)

Evidence-Based Practice and Use of Practice Guidelines

(根拠に基づく業務と業務指針の利用)

10月2日、薬学部4年生、大学院生、教職員約40名が聴講

The General Pharmaceutical Care Functions of a Pharmacist

(薬剤師の一般的薬学ケア機能)

10月3日、薬学部3年生、大学院生、教職員約160名が聴講



「生命の科学」を学ぶ 国公立4機関による連携講義を開催



県内国公立4機関による連携講義が、11月2日に本学を会場として開講した。連携講義は、本学、静岡大学、浜松医科大学、国立遺伝学研究所の県内国公立4機関が連携して県内の社会人や学生を対象に開催されているもので、今年で3回目となる。「生命の科学」を基本テーマに、平成15年度は「生命の系譜と操作」をサブタイトルとして、1月末まで全14回の講座が開かれる。

開校式では、約140名の受講生を前に大野忠副学長が「人間の全遺伝子情報の約97パーセントは普段は働いていないが、人間が取り組めば働いていない遺伝子も働き出す。主体的に学んでもらいたい。」と挨拶し、続いて第1回講座が開かれ、国立遺伝学研究所の広瀬進教授が生命の基本原則などについて講義された。

回数	講義題目・内容	機関名	講師名
第1回	生命の基本原則	国立遺伝学研究所 個体遺伝研究系	広瀬 進
第2回	発生と分化のしくみ	国立遺伝学研究所 個体遺伝研究系	上田 均
第3回	遺伝子から見た生物の進化	国立遺伝学研究所 集団遺伝研究系	斎藤 成也
第4回	堆積光合成色素から見た湖の歴史	静岡県立大学 環境科学研究所	相馬 光之
第5回	生物としてのイネの起源	総合地球環境学研究所	佐藤 洋一郎
第6回	生命操作をめぐる倫理問題	静岡大学 人文学部	松田 純
第7回	遺伝情報管理社会 その先駆モデルとしてのナチス・ドイツ	静岡大学 情報学部	南 利明
第8回	造血細胞の成熟と疾患	浜松医科大学 医学部	大西 一功
第9回	左右の科学	浜松医科大学 医学部	三浦 直行
第10回	微生物と人間との関わり	浜松医科大学 医学部	小出 幸夫
第11回	自然科学としての精神医学	浜松医科大学 医学部	森 則夫
第12回	食品による発がん抑制とメカニズム	静岡県立大学 食品栄養科学部	木苗 直秀
第13回	がんとゲノム創薬	静岡県立大学 薬学部	奥 直人
第14回	人類の存亡と植物遺伝子操作への期待	静岡県立大学 大学院 生活健康科学研究科	小林 裕和

図書館だより

図書館ホームページをリニューアルしました ～ デザインを一新、リンク集が充実しました ～

図書館ホームページが新しくなりました。もうご覧いただいたでしょうか。今回のリニューアルでは、より使いやすいホームページを目指し、各ページの上部にサービスメニューのナビゲーションを付けました。これによって目指すサービスにアクセスしやすくなりました。



サービスメニューをここに集めました。各タブをクリックするとそれぞれのページに切り替わります。

もう一つの大きな変更点はリンク集の充実です。文献探しに役立つサイトを中心に、時刻表・路線情報など生活お役立ちサイトへのリンクも揃えました。本や雑誌を探したい、文献を調べたいというときは是非利用してみてください。きっとお役に立てると思います。



[リンク]のタブをクリックします。

リンク集はカテゴリー別にまとめられています。各項目をクリックすると、さらに細分化されたリンク集が表示されます。

本学教員からの著書寄贈(平成15年11月)

図書館自由閲覧室の教員著作コーナーに配架してあります。

国際関係学部国際政治経済コース

国際関係学への招待 六鹿茂夫 小久保康之 前山亮吉 編著 三恵社
嵯峨 隆 教授(国際関係学部)
戴季陶の対日観と中国革命 嵯峨隆 著 東方書店

はばたき寄金からのお知らせ

学長企画イベント「創造力啓発コンテスト」の入賞者決まる

「創造力啓発コンテスト」は、本学創立15周年記念事業の一環として、廣部学長が企画され始まったイベントで、今年は、5名の学生から8件のアイデアの提案があった。学長は、提案者全員からアイデアの内容の説明を受けるとともに、提案内容に対する改善のアドバイスなどを学生に与えられた。学長による審査の結果、特別アイデア賞に2件、アイデア賞に1件のアイデアが決定し、表彰式が11月1日の剣祭初日に看護学部棟で開催された。

残念ながら今年も学長特別賞に該当する提案はなかった。



五嶋 慎也 さん

(入賞一覧)

賞区分	提案タイトル	氏名・所属
特別アイデア賞	リフレカフェ まっちゃんじ	伊倉 千絵、佐野 瑞紀、土屋 安友、畑山 博光 (経営情報学部3年)
特別アイデア賞	子供用ゲーム付き歯ブラシ	五嶋 慎也 (経営情報学部4年)
アイデア賞	ウォーター座布団、ウォーターソファ	張 運 (国際関係学部2年)

第6回学生文芸コンクールの入賞作品決まる

今年度の文芸コンクールでは文芸部門として、小説、紀行文、詩、短歌、俳句を、また、評論部門(指定課題なし)を募集したところ、文芸部門で28名から40作品(小説6・紀行文5・詩22・短歌1・俳句6)の応募があった。

はばたき寄金運営委員会委員の先生方などによる審査が行われ、次のとおり入賞作品が決定した。

表彰式は、「創造力啓発コンテスト」と同じく11月1日に行われ、廣部学長から賞状と副賞が贈られた。

(入賞一覧)

部門	賞区分	作品題名	氏名・所属
文芸	優秀賞	小説 黒い花びらの中で	中村 紘子 (国際関係学部3年)
		紀行文 紛争を越えて	平河 綾 (国際関係学部4年)

佳作	詩 五十音	鈴木 文子 (食品栄養科学部1年)
	小説 四日間	山崎奈津子 (国際関係学部3年)
	小説 十四年目のエゴイズム	伊藤 愛 (経営情報学部3年)
	紀行文 ニュージージーランド一人旅	石川 俊介 (国際関係学部4年)
	詩 覚	海老 原薫 (国際関係学部2年)
努力賞	小説 妄想	佐藤美和子 (薬学部2年)
	詩 戦場の花	望月小羊子 (国際関係学部1年)
	短歌 ある日のうた	吉田 美鈴 (看護学部4年)
	短歌 自然	松永 寛子 (経営情報学部4年)
	俳句 夏から秋へ 私のまわり	増田 有美 (食品栄養科学部4年)
評論	応募なし	

第5回学生スピーチコンテストを開催

今年度のスピーチコンテストが、11月1日に開催された。今回は、『20年後の私へのメッセージ』をテーマに、日本人学生4人、留学生5人の参加があった。入賞者は次のとおり。

[留学生の部]

賞区分	氏名	所属
最優秀賞	王 超群	経営情報学部4年
優秀賞	施 曉琳	国際関係学部2年
優秀賞	アイリーン ディアレスパティ	経営情報学部4年
優秀賞	涛 利	国際関係学部3年
優秀賞	姿 瑋瑋	薬学研究科修士1年

[日本人学生の部]

賞区分	氏名	所属
最優秀賞	山下 裕加	国際関係学部3年
優秀賞	大高 一人	国際関係学部3年



王 超群 さん



山下 裕加 さん

平成15年度はばたき寄金 寄金者(敬称略)

木村良平、園部尚、辻邦郎(薬学部)、伊勢村護、竹石桂一、中山勉(食品栄養科学部)、石川准、小谷野俊夫、津富宏、渡辺聡(国際関係学部)、小林みどり(経営情報学部)、相馬光之(生活健康科学研究科)、五島廉輔(環境科学研究所)、小池喬、寺田富雄、中川一政(事務局)和泉仁作(学生部)静岡県立大学後援会、静岡県立大学互助会

ニューキャッスル大学夏期語学研修に参加して

国際関係学部国際言語文化学科 2年 鈴木 絢子

みなさんはニューキャッスルをどのようなところだと想像しますか？ 「言葉で言い表せないほど素敵な場所」、これが私の答えです。もし今回、観光でニューキャッスルを訪れたのなら、これほどまでにすばらしいとは思わなかったでしょう。つらいことも楽しいことも、いろんな思い出がたくさんつまった街だからこそ、私の中で大切な場所なのです。

1ヶ月弱の研修中、宿泊先は大学の寮でした。初めはホームステイを希望していたのですが、寮の生活は予想以上に思い出深いものとなりました。寮にはドイツ、カタルなど、各国からのプログラム参加者が宿泊していて、異なる生活習慣を持つ人たちとの共同生活に戸惑いを覚えることもありましたが、それでも、食事のときはその日の出来事や自分の国の話をしましたし、一緒に買い物にも行きました。韓国から来た子が眠れないと言って、夜中に私の部屋を訪ねてきたこともありましたが、お互いに完璧な英語ではなかったかもしれませんが、いろんな話をして笑い、一緒に悩んだ思い出は私の視野を大きく広げてくれるものとなりました。



そうした生活の中で強く感じたのは、どの人たちも自分の国をよく知っているということです。これは日本にいても耳にしますが、どれほどのものなのかは研修ではじめて実感しました。私は日本についての知識不足に英語の力不足もあって、思うように伝えられない場面が何度もありました。最後まで聞こうと耳を傾け、理解しようとしてくれたみんなの姿勢に、とても救われました。

クラスには日本人のほかに、カタル、ドイツ、イタリア、台湾、中国、スペインの学生がいました。この人たちと同じレベルのクラスにいるというのに、英語力の差を大きく感じました。自分の言いたいことをうまく話せないのはもちろん、私は相手の言うことを聞き取るのにもひと苦労で、午後の授業には全くついていけないものさえありました。自分のレベルの低さを痛感させられたので、放課後、オープンアクセスセンターに行って勉強をすることにしましたが、そこで目にしたのは、同じプログラムに参加していたホセとスーの姿でした。彼らは、放課後は毎日、オープンアクセスセンターに通い、授業や寮でも常に英語を話そうと積極的でした。それに比べて私はどうだ

ったのでしょう。英語ができないとなげやりになったり、自信がないからと発言しなかったり……。一生懸命に自分の英語を磨こうとする人たちの姿を見て、この研修の意味を考えさせられました。今でも確かな答えはありませんが、たとえ自信がなくても、以前のように引っ込み思案でいる姿勢だけはやめようと思ったのです。

勉強面では落ち込むことの多かった私ですが、生活はとても充実したものでした。天気の良い日は大学の近くの芝生やティン河沿いのベンチで、友達とのんびりと日光浴しながら本を読みました。寮から少し歩けば映画館があり、地下鉄にしばらく乗ればビーチへ行くことも可能です。電車の窓からは郊外の美しい景色が広がり、見ているだけで自然と癒されていきます。地元のサッカーチームの試合を観戦に行った時には、周りの応援の迫力に圧倒されてしまいました。また、ニューキャッスルの人たちはとても友好的で、一人で買い物をしていた時に、お孫さんを連れのお年寄りから話しかけられたことが何度もありました。1ヶ月弱の生活はほんとうに穏やかにゆったりとした気がします。



左から2人が筆者

あれからずいぶんと時間が経ちましたが、今でもときどき戻ってみたいと思うことがあります。ニューキャッスルは今までの私を大きく変えくれた場所でした。言葉が当たり前に通じ、家族がいて、同じような生活習慣をもった人々に囲まれた暮らしが全くなかった時、私は自分の弱い部分をたくさん発見しました。けれど、ニューキャッスルで出会った多くの友達や先生がそんな私を支えてくれたおかげで、少しでも成長することができた気がします。海外で生活することは苦労の方が多いかもかもしれません。けれどそれを乗り越えて成長した自分に出会ったとき、あらゆることが大切な思い出になるのではないのでしょうか。

